文化・芸術

「水辺白鷺図」

1933～39年ごろ、油彩、カンバス
99・7センチ×59・5センチ

ラグーザ玉（1861～1939年）

ラグーザ玉は、1861（文久元）年、江戸新芝堀の生まれ。本名は清原玉。のちに夫となる彫刻家ビンツェンツォ・ラグーザ（1876～1927年）とは、玉16歳のときに出会い、その後イタリア・シチリア島の古都パレルモへ渡りました。玉が本格的に油彩画を描き始めるのは、この頃からです。1910年代から30年代にかけては充実した作品が多く描かれます。

33年、夫亡き後の玉は16歳の孫姪（うまごめい）、清原初枝（玉の生家清原家に桐生から嫁いだ長谷川しまの娘）に伴われ帰国すると、晩年は画室にこもり、四季の花、身近な果物をモチーフに描きました。日本近代洋画史からもイタリアの近現代美術史からも抜け落ちた玉の画業。その油彩画の特徴は、流麗な線と典雅な色彩にあるとされます。

本作は30年代に制作された成熟期の一点。湿地に2羽の白鷺（しらさぎ）が映え優美な気品が漂います。来年1月14日から常設展示室で展示します。

（小此木）

〈名画の扉〉 大川美術館コレクションから